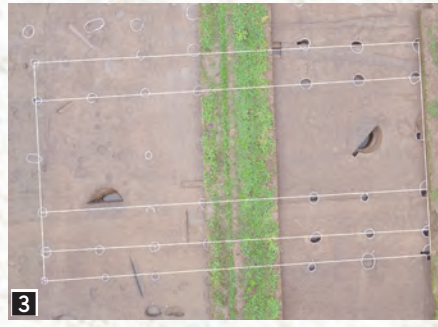
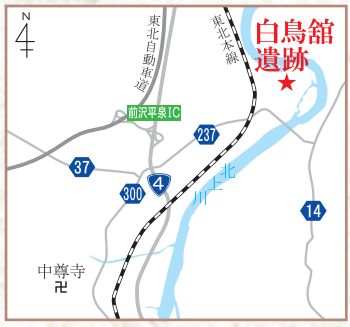




1北東上空から見た白鳥館遺跡。▼付近に船着き場があったと想定される **2**かわらけを焼いた窯跡。長さ約2^{メートル}。かわらけは平泉に供給された **3**秀衡の頃の建物跡で面積約140平方^{メートル}。遺跡で一番大きな建物 **4**水晶製数珠玉。製作の途中で半分に割れていることから、遺跡内で加工されたと思われる。直径2^{センチ}



奥州遺産

—ときを越え
受け継がれるもの—

第99回

白鳥館遺跡

Ⅱ 前沢字白鳥館 Ⅱ

市の東南端、北上川が大きくS字に蛇行する所に半島状にせり出した丘陵一帯が白鳥館遺跡である。

遺跡が本格的に使われ始めたのは、12世紀、奥州藤原氏初代清衡の頃。遺跡の北と南に船着き場の適地を擁していたことから、平泉の北の川湊として使われたとみられる。やがて平泉に毛越寺が完成する頃には、「かわらけ(素焼きの酒杯)」の生産、鉄の精錬、銅や石の加工など手工業生産の機能が加わった。現代でいうなら流通工業団地といったところだろうか。

このような特殊な場であったため、平泉が滅亡した後も使われ続けたが、15世紀半ばには川湊としての役割を終え、湊の記憶は忘れ去られていった。

遺跡は中尊寺や柳の御所遺跡から、およそ3・7^{キロ}の位置にあり、平泉の領域の広がりを示すものとして重要である。

藤原氏が滅亡していなかったら、都市平泉はどんな広がりを見せていただろうか。

広告

●広告の問い合わせは、(株)東広社 (☎ 0197 64 1523)